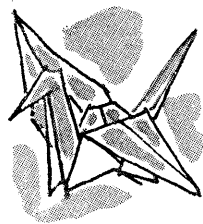


# 出 会 い



大 山 晴 子

空に向けて矢を射た。

矢は雲のかなたに見えなくなった。

幾年月のあと、

森の中で、一本の樫ひもとの木の幹に、

あの矢が突きささっているのを見た。

出会いということばをきくと、私は、いつも、このワーズワースの詩を思い出します。

私が幼稚園の先生になってまだ間もないころ、学級編成がえがあつて、受け持っていた三歳児の組を持ち上げられず、一年間親しんだ子たちへの未練も手伝つて、「一年ほつきりでは何もできない。相手が幼いだけに、別れてしまえば、つながりも消えてしまふ。幼稚園の先生なんて、はかないものだなあ」と、愚痴をこぼした時、併設だった小学校のN先生がこの詩を引用して戒め、教師と子どもが出会うことの大きな意味をさとしてくれたのでした。

「矢を射たその時はわからなくても、接した子どもたちの心の中に必ず何かの形で、教師の投げかけたものが残っている。いいものでも悪いものでも。子どもの年齢が幼かろうと、接する期間が短かろうと、教師のことは、態度、否、全人格がその子に与え

る影響力は、はかりしれない。だからたとえ一年でも、誠実に精一ばいの姿で毎日をすごすことがわたしたちのつとめなのだよ」と。

私の教え子の最年長は、まだ六年生で、私との出会いが彼らにとつてどんな意味をもつのか判断のしようもありません。「子どもは先生を選べない」ということは重味をもって感ずるとともに、教師という立場で純粋な子どもたちと出会う責任の重大さと恐ろしさを感じぬわけにはいきません。

私自身がこの世に誕生してから今日までをふり返ってみても、何と数多くの人と出会いたくさんの影響を受けたことでしょう。私が今、保育の道を歩んでいるのも、さまざまな人との出会いの結果でもあり、めぐりあった人次第で、私のめざす保育の精神は全くちがったものになっていたかもしれないと思うのです。

冒頭の詩を覚えてくれたN先生も、そして私も、それぞれに新しい職場に転任し、会って話すこともないのに、今もなお、この詩が私の心に輝きを失わずに何かを語っていることを考えると、人と人との出会いの不思議な力を思わずにはいられません。

出合いでこそ人は知らず知らずに何かを学び、働きかけあって今日とちがった新しい日を生きることができるとのだし、出合いがさまざまであるから、人それぞれに色とりどりの人生を歩むこと

になるのでしょう。

保育の場での二つの場面をつづって出会いのもつ意味を考えてみたいと思います。

### 今は亡きT君のお母さん

「先生！うちの子が今ふたれたのを見ましたか。ぶつたのはあの子なんですよ。怒ってください。悪い子をよくみて注意してくれないと困ります」

でっぶり太ったひとりの母親が形相すさまじく私にくっついてかかりました。二年目の新学期のことです。倍にふくれ上がった子どもの数にとまどい、泣きわめく子、逃げ帰ろうとする子らを追い、なだめるのに無我夢中でした。

子どもを追ってきて心配げに廊下から保育室のようすをのぞいている母親の中に、T君のお母さんもいて、子どもたちの遊びのなりゆきをみていて我慢ができず怒りを爆発させたのでしょうか。

私はその剣幕に圧倒されたオロオロするばかりでした。「子どもがぶつたりたいたいするのは、当り前なのに」という反発もありました。しかし何も言えず「すみません」と小さな声で謝り、こぼれそうな涙をこらえるのがやっとでした。心がふさがってならない事件でした。

やがてひと月、ふた月とすぎ去っていくうち、T君が大変独占欲が強く攻撃的で、友だちと協調して遊べないことや、すぐぶつたりたいたりする子であること、母親自身が体罰でしつけていたこと、自分の子さえよければという利己主義な点がみられ、しかもひとりっ子のために盲目的に愛している面があるということがわかってきました。そこで連絡帳や面談を通じてT君のありのままの姿を知らせ、社会性をつける必要や、親自身の態度に問題があること、集団生活の教育的効果などを率直に伝えるよう努めてみました。案外、気性のサッパリしている人で、いったん気心が知れると心安く、自分から、相談ののってくるよう頼むのでした。二学期の中ごろには、子どもたちのけんかしあうようすも笑ってうなずいて見てくれるようになりました。家が酒屋でしたので、ダンボール箱がたまると、園で使ってくれるようにと、父親がトラックに積んで運んでくれるほど協力的な姿に変わったのでした。

それから四年後。T君が三年生の夏、お母さんは亡くなりました。癌だったそうです。

あまりにあっけない死でしたので、なおさら、私にとつては忘れられないお母さんのひとりになりました。

生の声で私にくつてかかったお母さんでした。どんな母親も気

持ちの底に「自分の子にかけては、理屈では納得できないものをもっている」ということを教えてくれたお母さんでした。そして、誠実な心で接しさえすれば、どんなむずかしいお母さんもわかってくれるという力と光明を与えてくれたお母さんでした。

### S子のこと

S子は九月に入園してきました。当時四歳でしたが、四歳児の学級では、どうしてもみんなと歩調が合わないということ、一週間後私が担任していた三歳児の組に再編入されました。みるからに発育が劣っており、三歳の子どもより幼なくみえました。歩くのがやっと、かけっこしてはころび、両足とびはもちろん、階段の上り降りも満足にできず援助が必要でした。

言語面も遅れており一種独特な発声をし、その要求をくんであげるのがひと仕事でした。

他の子どもたちと同じ遊びや活動に集中してとり組むということとはできず、興味の移行にまかせ、部屋から部屋へ、庭へとび出し、居場所を転々とする一方、一つのことには執着し何日も同じことをくり返すのです。ある時は、セロテープをカッターで切つてはりつけることに興味を持ち、床、机、鏡、ガラスとはり歩き、始末におえないので禁止すると、今度は自分の顔中すまな

くはるといふこともありません。

幼稚園に通うかたわら、他の治療機関にも通っていたのですが、幼稚園の健康的な集団生活が、S子にとって最も影響力の期待できる場だと考えたと入園を断わるわけにもいかず、言語や社会性の開発と、生活習慣の育成を重点的なねらいとして、ある種の使命感に燃えてS子を受入れることになったのです。

しかし、専門の知識や指導法を知らない私は、万一同り返しのつかないまちがいをしているかもしれないという不安とおそれがありました。集団行動をとる必要がある時は、S子につきっきり、ふだんの遊びの場でもS子のいたずらのあとしまつでそのおしりについてまわることが多く、他の子どもはいわば自学自習となり、目をかけ、ことはをかけることも限られ、「S子さえいなかったなら……」などという思いをいだくこともあり、悩みと迷いと煩悶の日々の明け暮れでした。反面遅々とした中でもT子の成長を見いだして大きな喜びに浸る日もあり、忙しくも充実した毎日でした。

やがて、子どもたちがS子を自分たちの仲間として何くれとなく面倒を見たり、はじめは奇異の目を向け迷惑げにS子を見ていた母親たちがいつしか見方を変え、互いの家にS子をよび合つてS子の生活範囲を広げるような理解ある動きが見えてきました。

子どもたちの心の中に自然と、人間社会にはいろいろな不幸を背負っている人がおり、それらの人々とみんなが互いに協調しあいカバーしあつて生きていかなばならないという姿を知つたとして、S子によってかけがえのない勉強をしたことになりました、とかく知的教育を望みがちな母親たちにも「心身ともに健全であれば、子どもの内部に自ら育つものがある」という確信を持ち、いたずらに過度の要求を出したりせず、子ども自身の育つ力を信頼する動きに変わったのは、幸運なことでした。

子どもたちや母親たちがばかりでなく私自身にとつても、S子の指導を通して変革が迫られました。今までやっていた画一的な指導法ではどうにもならず、ひとりひとりの興味や発達に即応して、本当にひとりひとりの心を育てる保育をせねばならないことに、まさしく突き当たつたのでした。子ども自身が選ぶ遊びを大切にすることで新しい目を開くような個別の指導を心がけるようになったのです。

またS子の治療に当たつておられたお茶の水大のT先生の「S子は、その子自身でみれば90%円満な発達をしている」ということとは、一般的な子どもと比較してしか見られなかった子どもの見方を変えるものとなりました。

S子の進学問題に当たつてさまざまな養護施設や福祉施設を回

り、人に知られない不幸な問題を背負った子どもたちの世界の一端を知り、新たな視点でものを考える機会も得ました。

S子は種々の事情や、S子自身の生活基盤を築くために、交通戦争のこの都会地を離れ二年前石川県の田舎に越していきました。自然に囲まれた生活の中で今は幸福でしょうか。

S子とのめぐりあいによって学んだかずかずの教えは、私のめざす保育の心のあるものを変化させ、あるものを強固にしてくれました。

S子が遠くに行ってしまった今、よしなしごととは思いつながらもう少し心を配ってあげればよかったと胸の痛みを感じながら、レコードが流れるとキラキラと輝いたS子の黒い瞳を思い出しています。

(中央区立泰明幼稚園)

注 60ページ「幼児ののぞましい言語指導は、どのようにすればよいか」より、について

これは、大津幼稚園の研究報告集の一部を園側のご承諾を得て、転載させていただいた。この研究報告の内容は、三年間にわたるほう大な実践記録にていねいな考察が附されたもので、資料集としても貴重である。これからも機会をみて、誌上で紹介していきたいと思っている。(編集部)

訂正

四月号 25ページ「子どもをもっている親と音楽」の著者徳丸吉彦氏の所屬が、「国立音楽大学」となっておりますが、「お茶の水女子大学」と訂正させていただきます。

なお本文中28ページ上段11行目「クラシック音楽だけが音楽だけだ」は「クラシックだけが音楽だ」の間違いです。おわびして訂正いたします。(赤間)